



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレター No. 159

2022年4月



救い主の神イエス・キリスト

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

ガラテヤ2:20

1. イエス・キリストは救いの神

イエス・キリストが身代わりになって、十字架で血を流し死んだことによって救われます。すなわち、その主イエス・キリストによって救われ、永遠の命が与えられ生きているのです。ですから、キリストを信じる者はキリストと共に十字架につけられ、またキリストと共に生きているのです。それは次の御言葉からも明らかです。

キリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、復活の姿にもあやかれる。(ローマ書6:4-5)

キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。(ローマ書6:11)

キリストと共に十字架で罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないため。(ローマ書6:6)

神の子の名を信じている・・・永遠の命を得ていることを悟らせたいから。(ヨハネ第一5:13)

偽ることのない神は、永遠の昔にこの命を約束してくださいました。(テトス1章2-3節)

そして、「神はこの世を愛しひとり子をお与えになった。これはわたしを信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」ヨハネ3:16とあるよう

コルネリオ会教職顧問 牧師 金学根
に、私たちの救いは神が永遠の前に約束してくださいましたことです。ですから私たちは、イエス・キリストの十字架の贖いによって赦され永遠の命を与えられます。

この永遠の命を約束してくださいました神は、イエス・キリストです。聖書は、口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからだとローマ書10章9-10節で語っています。

2. この世に来られた神はイエス・キリストである

聖書はイエス・キリストに関することを記録した書物です。旧約聖書は、来られるイエス・キリストについて、また新約聖書は、来られた救い主イエス・キリストについて書いたものです。つまり、聖書はアダムが罪を犯し、永遠に生きる存在から死ななければならぬ肉体となった人間を神が救いだし、再び永遠の命を与えるという神の救いの計画を書いた書物なのです。

サタン誘惑と人の死については、創世記3章1-6節、創世記2章16-17節に記されています。墮落した天使はサタンとなり、サタンは蛇の姿で女に現れ女を誘惑し、女は善悪を知る果実を食べ死ぬことになったのです。

人は永遠の世界から死の世界へ落ちたのです。ここで「死ぬ」という概念は、肉の死、魂の死、霊の死のことです。神は天地と人間を創造し、人に肉と魂と霊の祝福を与えられましたが、人は罪を犯し祝福は変わりました。罪を犯した結果、肉の祝福は、永遠に腐らない肉から腐る肉に、魂はサタンの性格、霊はサタン

の子になってしまいました。

善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを食べると必ず死ぬ。(創世記2：16-17)

3. この世に来られた救い主は創造の神である

人が罪を犯して、人は死ぬことになったとき、神は救いの計画を立てられました。

「わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を砕き、おまえは彼のかかとを砕く。」創世記3章15節

この文章の構成は、初めに「敵意をわたしは置く」とあります。敵意は(「エーヴァー」אִיבָּה)です。その「敵意」が置かれるのは、「おまえと女の間」そして「おまえの子孫と女の子孫の間に」、「おまえ」とは、直接的には「蛇」ですが、真の意味はその蛇の背後にいる「サタン」です。また「女の子孫」は「神の民イスラエル」(教会)を指すこともあれば、メシアであるイエス・キリストを指すこともあります。

そして、彼はおまえの頭を砕き、おまえは彼のかかとを砕く意味ですが、頭を砕くと言うことは致命的なことです。それで最後のさばきのときにサタンは「火と硫黄の池に」投げ込まれるのです。(黙示録20：10)

次の聖書箇所にも救いの計画が示されています。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。(ピリピ2：6-8)

罪が支払う報酬は死です。神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

(ローマ6：23)

彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

(ヨハネ1：12)

1) なぜ、イエス・キリストが創造主である神なのか? ヨハネ書1章

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったも

のは何一つなかった。(ヨハネ1：1-3)

その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。(ヨハネ1：9)

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。

(ヨハネ1：14)

言は命であり、命は光です。その光はこの世に来られ、言は肉体となり人間としてこの世に来られました。つまり、神の御子として来られたということです。その言とはすなわち、イエス・キリストです。

創造する前に言があり、その言は神(三位の神)と共にあって、この言は神であり、創造前の初めに神と共にあって人間としてこの世に来られた救い主イエス・キリストです。

2) 言である神の御子の救いの方法

罪人となった人間を救う神の救いの法則は、血によって贖い救うというものです。「血は命を持っており、血を流すことなしには絶対に赦しはない。」つまり、血は命であり、その血は罪を赦す。だから、神である御子がこの世に来られ血を流してくださり救いを完成させようとしたのです。次のように聖書には記しています。

生き物の命は血の中にあるからである。わたしが血をあなたたちに与えたのは、祭壇の上であなたたちの命の贖いの儀式をするためである。血はその中の命によって贖いをするのである。(レビ記17：11)

聖書に示された小羊の血は、救い主イエス・キリストを象徴しています。

神様は子羊の血による贖いを、最初は、アダムに、そしてカインとアベルに、さらに、アブラハムに具体的に示しています。イスラエルの民全体にも示しました。

神様は、幕屋で血のいけにえを通して、血の贖いによって罪が赦される燔祭(はんさい)を行わせたのです。すなわち、年に一度大祭司が至聖所に入り、血の贖いを通して赦されるというものです。(レビ記16章、ヘブライ書9章)

3) イエス・キリストの十字架の血の贖いによって罪が赦される

世の罪を取り除く神の小羊はイエス・キリストです。イエス様の十字架の贖いによって、わたしたちは大祭司のように直接至聖所に入ることができます。イエスの血によって至聖所に入り、贖罪の座に行ける。そし

て私たちの罪が赦されるのです。

イエスキリストを信じる者は、イエスの血によって贖われ永遠の命を得ます。

人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる。

(ローマ書10:9-10)

(おわり)

コルネリオ会創設者利岡中和先生のこと

聖書キリスト教会 会長牧師 尾山令仁

長たちが飛び込んで来て、最後には大隊長まで来て、一応その場は収まりました。利岡先生は、たとえ護身の目的であったにしろ、上官の前で軍刀を抜いたわけですから、陸軍を免職してもらえないのではないかと期待していたのですが、例の中隊長は左遷、利岡先生は嚴重注意だけで、免職にはなりませんでした。

1. 陸軍の秀才にも悩みがあった

私が陸軍経理学校に入校したとき、校長は迫栄吉主計中将でした。利岡中和先生は、この迫中将と同期の方でした。利岡先生は、同期生の中でも秀才で、生徒科生(士官候補生)と甲種学生(陸大相等)の時、いずれも一番で、恩賜の銀時計を頂いております。さらに東京帝大(今日の東大)に送られ、学びをしておられます。将来は、陸軍の衣食住をまかなう大物軍人として期待されていました。

そのような利岡先生にも、深い悩みがあったのです。それは、先生がクリスチャンであり、どうしても陸軍と合わないということでした。そこで、退職を願い出るのですが、この偉才を失いたくない陸軍では許可を与えませんでした。

2. 苦肉の策に出る利岡見習士官

ある時、演習があり、それに見習士官として参加するのですが、休憩の時、中隊長から呼び出されました。「おい見習い、酒を持って来い」と言うのです。利岡見習士官はこう答えました。「私は、陸軍経理学校で、演習は実戦と同じであると教わりました。ですから、酒を持って来ることはできません。すると、中隊長は大声で、「見習いのくせに生意気なことを言うな。いいから持って来い」と言うのです。利岡見習士官は、頑として応じません。業を煮やした中隊長は立ち上がり、腕力を振るおうとしたその時、利岡見習士官は護身のため、さっと軍刀を抜くやいなや「かかって来るなら、どこからでもかかって来てください。軍刀を抜いて、やり合おうではありませんか。」「私はこれでも剣道五段」と言ったかどうかは分かりませんが、利岡見習士官の構えは鋭く、おじけづいているところ、小隊

3. 利岡先生との出会い

利岡先生との出会いについては、利岡先生によって導かれ、コルネリオ会の会員となった義父、平山銈次郎元主計大佐について述べなければなりません。義父、平山は、甲種学生のころ、将来は将官が約束されたようなものなので、もっと確かなものを求めている時、同じ甲種学生の永井円針氏の誘いで、利岡先生の集会に行き、その時、「永遠の命」という説教を聞き、これだと決心し、クリスチャンになった人です。クリスチャンであったがゆえに、仙台の第二師団の経理部長として、ガダルカナル作戦にやらされるのです。主のお守りがあって、九死に一生を得て帰国します。マラリヤにかかり、マニラの陸軍病院、広島陸軍病院で静養の後、閑職として陸軍経理学校付となります。平山の義父とはそこで最初に会うわけです。

ところで、平山の義父の家と私の家とは割合近くにあり、同じく近くに住んでいた陸軍経理学校の同期生とよくその家の前を一緒に歩くのですが、ある日、平山の義父の家の前に、一枚の張り紙があって、こう書いているのが目に留まりました。「キリスト教家庭集会入場無料どなたでもおいでください」私たちはこう話しあったのです。「もと教官の家でやっているのだから、入ってみようか」こうして恐

る恐る入ったのです。平山の義父は、元軍人らしくなく、腰の低い人で、私たちが歓迎してくれました。そして、私たちが利岡先生に紹介してくれたのです。「利岡先生。今日は元、陸軍の経理部の士官候補生が二人おいでになりました」とすると、利岡先生は「よく来たな」でも何でもなく、「わしは陸軍の話は嫌いじゃ」と言って、そっぽを向いてしまわれました。取り付くしまがないので、もう二度とその集会には行きませんでした。おそらく利岡先生の「土佐つぼ」が顔を出したのでしょう。

それから、私はアメリカの兵隊たちが開いていたGI ゴースペル・アワーという集会で救われ、その後、主によって召され、献身して牧師となる道を歩み始めました。神学校を卒業し、開拓伝道をする日、私はかつての教官平山銈次郎大佐の所へ挨拶に行きました。その日からずっと私の始めた教会に来て、若僧の私を助け、教会の長老として、すばらしい働きをしてくれました。それからというもの、平山家に来られる利岡先生の集会に私も加えていただき、利岡先生と親しい交わりを持つようになりました。

4. 利岡食堂、十字架まんじゅう

利岡先生は、陸軍を退職された後、生活のために何かをしなければならないと考えておられましたが、元軍人がやる仕事や、そうやたらにあるものではありません。そのころ、丸ビルが東京駅前に出て、入居者を募集しておりました。ことに店ということになると、申し込みが殺到し、困り果てていたそうです。多くの人は袖の下を使っていた中で、一切それをしなかった利岡先生の所が当選し、丸ビルの中に利岡食堂が誕生するわけです。ある時、利岡先生が聖書を読んでいると、パウロが「われは福音を恥とせず」と言っている箇所に来て、利岡先生はこれを実行すべく、まんじゅうの上に十字架の焼印を押し、「十字架まんじゅう」を売り出したということです。

5. 「私はカナンの女でございます」

ある時、利岡先生が地方の部隊のある所で家庭集会を開いておられたことがありました。すると、そ

こに一人の軍人をご主人に持つ奥さんが来ておられ、「先生。主人が救われるようにお祈りしていただきたいのですが」と懇願しておられました。すると先生は「できません。私はあなたのご主人に会ったこともないし、『します』なんて言ったって、すぐに忘れちゃいますからね」と言われました。利岡先生らしさがよく表れている言葉ですね。すると、その婦人はそれで諦めたりしないで、こう言ったと言うのです。「私はカナンの女でございます」。すると利岡先生は、「分った。紙にあなたのご主人の名前を書きなさい。」こうして、利岡先生はその人の救いのために祈り続け、その人は救われたということです。

利岡先生は、戦後「コルネリオの後」という雑誌を出しておられました。私の感想は、利岡先生という方は、主のためなら非常識と思われるほどの生き方を平気でされた方だと思います。ですから、利岡先生によって導かれた軍人は、私の義父のほか、生地竹之助少将、永井円針中佐をはじめ、かなり多くの方がおりました。私が先生に、「陸軍と両立しないというキリスト教信仰を軍人に持たせたら、皆先生と同じように陸軍を辞めちゃうとは思われなかったのですか」と聞きましたら、「辞めるのは私ぐらいで、みんな後に残っていますよ。その人たちによって陸軍を変えてほしかったのです。一人では出来なくても、人数が増えれば出来ますからね」と言われたことを今でも思い出します。（おわり）

献金感謝（2021. 7. 1-2021. 10. 31）

皆様の献金を心から感謝します。
飯塚正実、石井克直、石川信隆、今市宗雄、海野幹郎
圓林栄喜・さゆり、大頭真一、郷家一二三、加瀬典文
北川政雄、佐藤順、佐藤敏郎、瀬在道晴、甲斐悠樹
田中（滝口）牧子、手塚正昭、常盤一崇、長橋和彦
匿名、荻原洋聡、ボンドヨウコ、宮岡修二、森祐理
山下和雄、山田伊智郎、山本浩、吉田靖

献金振込先は、次のどちらでも結構です。
郵便振替口座：00130-3-87577（コルネリオ会）
同振込用口座：〇一九（ゼロイチキユウ）店（019）
当座 0087577
銀行振込口座：三菱東京UFJ銀行 店番 505
口座番号 0385701
ジェーエムシーエフ ナガハマタカユキ

救いの証

「たとえわれ死のかげの谷を歩むとも禍害を恐れじ、
汝我とともに在せばなり。汝の笞なんぢの杖われを慰
む。」(文語訳 詩編 23 篇 4 節)

「我ら基督におり、基督我らにいますことを」(祈祷
書文語訳 聖餐式の式文)

コルネリオ会の皆様、初めてお目にかかります。

甲斐悠樹と申します。まだ 25 年しか生きていない
若輩者であります、証させていただきます。

この証では私の 25 年間を振り返りながら、要所要
所で、聖書の言葉がどのような働きがあったかを共有
させていただきたいと思います。

故郷は横浜市の金沢文庫という海の近い街で 家は
一般的な家庭であり、信仰は浄土宗でした。

私が初めてキリスト教に触れたのは平成 24 年、16
歳の頃だったと記憶しています。あまり勉強熱心では
ない高校だったため遊ぶ毎日でしたが、日本キリスト
教団の長老派の信者の先生の勧めもあり、ふと教会に
行くようになりました。先生からは宗教改革者カルヴ
ァンの話をよく教授していただきました。

初めて聖書を買ったのは横浜のダイエーの本屋でし
た。教会に行くのなら聖書は必要だと思い購入しに
行きましたが聖書に多くの訳があるとは当時知らず、
ハードカバーのたいそうありがたみのありそうな包装
をしていた文語訳の聖書を買ってしまいました。内容
は文語のため難解でしたが、これがきっかけで現在も
文語訳聖書を日常使いしています。

聖書も手に入れ、いざ行った教会は家から近い長老
派の教会で日本長老教会神奈川中会の横浜金沢文庫キ
リスト教会という教会です。

1 年ほど通った後、入信しようと思い立ち信仰の違
う家族の反対もなく平成 25 年の 12 月、クリスマス
前に受洗いたしました。詩篇 23 篇の聖句は洗礼に導
かれた際に心に留めた聖句です。

私がキリスト教徒になったのには明確な理由はあり
ませんでした。ただ、聖書の言葉は自分の人生におい
てポジティブな方向へ導いてくれる、ということだけ
は明確に感じていました。特にこの詩篇の句は、どん

会員 甲斐悠樹 (洗礼名：塔登者シメオン)
な時も力強い存在が共に歩んでくれているというこ
を著しているのではないのでしょうか。

そして何よりも命をかけてカルヴァンが守りたかつ
たもの、崇高な信仰を感じたからでした。

関西学院大学入学のため西宮に移り、必然的に新たな
教会へと移りました。その教会は母教会の牧師先生に紹
介された教会だったため大学生活 4 年間の内 2 年間は
通い続けました。しかし、自分には合うことはありません
でした。私が初めて教会に躓いたのはこの時で、キリ
スト教の教理や聖書に躓いたわけではありませんでした。

それは政治的な思想に躓いたのです。西宮の教会
は社会運動などに重きを置いており、頻繁に政治的な
集会などを行っていました。礼拝の説教も 8 月に近づ
くにつれ、日本人は罪を被っており謝罪しなければな
らないなどの内容が増えていきます。一般的な日本人
として育てられた私にとって、初めて感じたキリスト
教への違和感でした。信徒の方に、政治団体の集会に
誘われた際、特に興味もなかったため断ると「クリス
チャンなのに？」と言われたのは衝撃的でした。キリ
スト教徒であることによってそのような決めつけをさ
れることに嫌悪感を抱いたことをよく覚えています。
自分はそのことから抜け出したいという気持ちが高まりま
した。しかし、生活においてキリストが共にいるとい
う感覚は絶えず感じていましたため、キリスト教に対
する帰依は消えませんでした。

そんな時、戦前の日本聖公会の祈祷書に「天皇のため
の祈り」(現在は用いられていない)があることを知り、
興味が沸き一度、聖公会の教会に行こうと思いました。
家から一駅のところにある西宮聖ペテロ教会に初めて行
ったのは平成 29 年頃だったかと思います。初めて参列
した聖餐式の退堂聖歌の風景、聖歌 532 番をバックに
司祭一行が厳かに退堂する姿を見て感動を抱きました。

聖公会の礼拝は伝統を護り厳かに行われ、信仰は祈
り、そして非常に素朴なものであると感じ魅了されま
した。説教では聖書の事だけを語り、礼拝の中心がキ
リストであるというのを感じることが出来ます。また、
聖公会の「via media」(「中道」)という思想にも共感

を抱きました。多様性の中にも祈祷書の統一を持っており伝統を重んじる姿勢こそ、私に合った信仰ではないかと感じ、宗旨変えを行いました。

堅信を受けるにあたって洗礼名を決めなければならなかったのですが、「塔登者シメオン」という非常に珍しい聖人の名前を頂く事に致しました。これは、大学1回生の時に受講したキリスト教の歴史の授業に登場した聖人で、ややこしい名前の人々がたくさん登場する中、鮮明に覚えていた聖人です。聖シメオンは400年代に活躍したシリア地方の聖人で、塔の上で祈り続けた聖人です。

塔の上で静かに祈り続けるという姿勢は自分の仕事に忠実であることと、メンタルを強く持つことを教えてくれています。これからの自分の歩みに力強く見守ってくれる聖人ではないかと思い洗礼名としていただきました。堅信式の当日は多くの友人に集まっていた見守られ、キリスト教という同じ信仰を持っている同志が与えられており、自分は恵まれていると感じました。

大学卒業後は、大阪のテーマパークUSJの運営会社で正社員として働くことができました。仕事では何度も挫けそうになりますが、その度に聖書の言葉が与えられ、自分が一人ではない、強い存在に守られているということを自覚し前進することができました。

そして、自衛官であった父の影響から幼き頃より一度は経験したかった自衛隊への入隊を決め、令和3年に25歳で海上自衛隊に練習員として入隊し、舞鶴教育隊で教育を受け、広島県呉へ配属されました。自衛隊生活は過酷を極めるものでした。しかし、そんな死の陰の谷のような状況下でも力強い存在が守ってくれていると何度も実感致しました。

私にとって神は力強い存在です。その存在ゆえポジティブに生きていくことができます。現在の私の指揮官の方針は「前へ」です。何事も前進する時には恐れも伴います。しかし、我らには力強い存在が供にいてくださいます。それによって前進することに恐れる必要はないのです。

以上を私の証とさせていただきます。皆様と皆様の家族、自衛隊と我が国に神の御加護がありますように。
在主 (おわり)

コルネリオ会例会の恵み

会員 圓林栄喜

コルネリオ会の例会に参加して30年以上になります。最近のコルネリオ会例会を通して感じていることを若干証したいと思います。

1. 離れていても交われる恵み

新型コロナウイルス感染拡大前まで、例会の会場は都内の会場を中心に実施してきました。転勤族の自衛官は地方で勤務する時は例会に参加できず、メールでの報告で内容を確認しておりました。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、都内での集会も難しくなりましたが、他方オンラインでの開催が実現し、国内外問わずその恵みに加わることができるようになりました。これはコルネリオ会会員としては画期的な事でした。中野副会長はアメリカから参加してくださっていますし、関兄は沖縄、長濱兄は愛知、そして私は宮城からとどこからでも参加できることは恵みです。

2. 新メンバーが加わる恵み

新しい牧師先生や兄弟姉妹が加わってくださっていることも恵みです。自衛官クリスチャンだけでなく、関心を持ってくださる兄弟姉妹が加わってくださることにより、これまでのコルネリオ会にはない視点や考え方も加わることで、私たちもまた学ぶことが多いと感じています。

3. 例会内容の恵み

さらに、最近の例会は聖書の学びに、先生方のメッセージや兄弟姉妹の証も多く加わり、多くの神様からの語りかけや気づきを与えられています。

例会は毎月第2土曜日午前9時～10時30分の間、オンラインで行っています。興味のある方は、
会長：石川信隆 (cgishikawa@m4.dion.ne.jp)
までご連絡下さい。 (おわり)

ロシアがウクライナに侵攻しました。武力による一方的な現状変更の試みは世界各国から非難を受けています。ロシアが速やかに部隊を撤収し、ウクライナに平和が訪れるよう祈りましょう。

編集子

